

## ワークショップ「科学リテラシーと科学基礎論」の趣旨

服部裕幸  
南山大学

近年、人々の科学リテラシーが問題となっており、いくつかの分野においては、それは緊急度や重要度を増しているように思われる。たとえば、科学技術政策や科学教育をどうするか、ということが問題になったとき、市民が自分なりの見解をもち、それを表明していかないと社会的合意は得られない。しかし、そのためには、市民はこれらの問題にかかわる科学的知識を相応にもっていなければならない。もちろん他に理由はある。高校での理科教育の弱体化、若者の理科離れが叫ばれるようになって久しいが、状況は改善されているようにはみえない。このことは当然科学リテラシーの弱体化に繋がるだろう。科学（的議論）への無理解、オカルティズムへの傾斜、科学への過度の楽観的態度、などはこうした状況に陥っていることのサインであるかもしれない。科学基礎論研究者がこうした問題にどういう方向から、どのような仕方でも貢献できるのか、また具体的にはどのようなことを提案したり、問題提起したりできるのか、といったことを明らかにするというのがこの企画の趣旨である。

具体的にはまず、森田が、科学リテラシーを科学の境界面定問題という観点から考える。巷では、科学的言説に見えて、その実はかなり怪しげな話、疑似科学的な話も無いわけではない。そこで、まず何が科学的で、何が科学的でないのかということを変更して考えてみたい。次に、横山は科学リテラシーを科学研究のあり方という観点から考える。近年の科学研究や技術開発のなかでは、技術あるいは実用化と直結しやすい研究が目につくが、そうでない研究ももちろんある。にもかかわらず、すべての科学研究がこうしたスタイルでなされるかのような理解がなされ、それに基づいて科学研究にかかわる意思決定がなされているかに見える。この点について最近の脳神経科学の研究状況を例として問題提起したい。次に、科学リテラシーを服部は科学・技術の社会的評価という観点から考える。科学・技術はしばしば研究者の予想を超えた応用や発展を示すことがあり、それは社会のあり方を大きく変えることがある。脳死者からの臓器移植問題、携帯電話やネット社会の問題などは最近の例である。ここでは最近の脳神経科学の場合を検討する。